

矢作川流域圏 担い手づくり事例集Ⅲ



学童保育木造化プロジェクト



矢作川流域圏懇談会
2022年3月

矢作川流域圏懇談会 とは…

長野、岐阜、愛知の3県を流れる矢作川には、矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009（平成21）年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取組が必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることをめざす「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

流域圏懇談会のメンバーは学識者・行政・関係団体・市民団体などで構成され、地域部会（山・川・海）や市民部会に所属し、各々が設定した課題の解決策に向けて情報を共有するため、ワーキンググループやフィールドワークを行っています。

流域圏担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、2013（平成25）年度からの4年間、矢作川流域で主として中山間地振興に携わる団体（一部川や海の活動団体も含む）の取材記録をまとめ、流域内の多様な主体によるネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」を4冊発行しました。2017年からは、取材先として川や海の環境保全や水辺空間の再生・利活用に携わる団体を増やし、タイトルを「流域圏担い手づくり事例集」と改め、2018年までに2冊を発行しました。

これらの事例集づくりを通じ、流域内のネットワークが更に広がり、流域内でお金、人材、物がまわる流域内フェアトレードと、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が進むことをめざしています。

.....

2019～20年度は流域圏懇談会10年誌作成のために事例集の発行を休止しました。この10年誌で6冊の事例集づくりをふりかえり、持続可能な流域圏づくりのためには山、川、海のエリアだけでなく、都市域の住民を巻き込んだネットワークづくりが必要であるという結論に至りました。そこで3冊目の「流域圏担い手づくり事例集」は、これまでのように個別の取材記録をまとめるのではなく、都市を巻き込んだ流域圏づくりにつながるひとつのプロジェクトを取材対象とし、プロジェクトを支える複数の方にお話をうかがって、その立体像を描くことを試みました。



目 次

1	学童保育木造化プロジェクトものがたり . . .	1
2	木造化された3つの学童保育	
	山里学童保育クラブ	3
	あおぞら学童保育クラブ	5
	松栄第一・第二学童保育クラブ	7
3	プロジェクトに関わってきたさまざまな人びと	
	鈴木建一さん	9
	東海林修さん	12
	唐澤晋平さん	15
	小原 淳さん	17
	白井仁士さん	20
	安井 健さん	22
4	まちと森とを繋ぐこと	
	～ 今こそ、「矢作川の恵みで生きる」 ことの共有を ～	
	24
5	おわりに	28

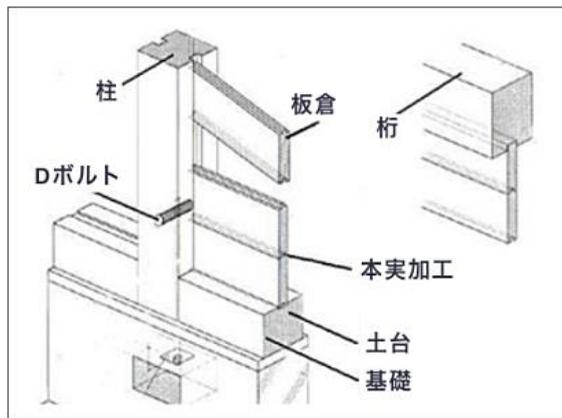
1. 学童保育木造化プロジェクトものがたり

2017年に名古屋で設立された「森と子ども未来会議」（以下、未来会議）は林業者、製材業者、工務店、大工、建築家、研究者、学童保育の関係者などで構成されており、学童保育の木造化を進めている。物流会社の役員を務める鈴木建一さんがこの会を立ち上げるまでには、いくつかの出来事があった。

●板倉構法との出会い

刈谷市生まれの鈴木さんの祖父は製材・建築業を営んでいた。祖父が建ててくれた家に住んでいたが、鈴木さんが50歳の頃、建て替えることになった。そこで祖父のように地元材を使い、更に冬は暖かく夏は涼しい、自然エネルギーを活かした家を建てたいと考え、森林や林業、木造建築について学ぶようになった。

2013年の「日本木工機械展」の講演会に参加した時、建築家の東海林修さん、岡崎市額田地区で林業を起業しようとしていた唐澤晋平さんと出会い、地域の森の木で板倉構法の建物をつくるという発想に魅了された。板倉構法は木組みを活かし、柱と柱の間に板を落とし込む伝統的な木造建築技術。調温・調湿作用に優れていることに加え、木肌を内外ともに現して建てられるほど耐震・耐火に優れた構法である。



板倉構法模式図。釘を使わず、柱と柱の間に板を落とし込む（東海林建築設計事務所HPより）

●学童保育との関わり

学童保育は、共働きやひとり親世帯の小学生を、放課後や長期休暇期間中に預かり、保育する施設である。鈴木さんは日本福祉大に在学中、アルバイトで学童保育の指導員をしていた。時が下り、2017年、全日本建設交通一般労働組合（建交労：建設や運輸、学童・競馬場・競艇場など半公共施設で働く人などの組合）の勉強会で委員長と交流したが、この人は学童保育指導員だった。名古屋の学童保育の施設の殆どはプレハブで、夏は暑く冬は寒く、子どもの声が反響する等の問題があることを聞いた。プレハブが多く使われる理由の一つが、移転が容易なことである。名古屋市は、保護者会が土地を確保すれば学童保育の施設を貸与するシステムを採っており、土地の所有者の意向で移転しなければならないことが多い。そこで、解体・移築が可能で、災害にも強い板倉構法で学童保育を木造化するための取組が始まった。



山里学童保育クラブ 木造化の前（上、山里学童保育クラブHPより）と後（下）

●未来会議の設立へ

2017年6月から会議や勉強会を重ね、同年10月に未来会議が設立された。設立趣意書に示された目的と事業方針は以下の通りである。

“子どもと、保護者と、地域と、みんなで作ろう学童保育施設”



名称 森と子ども未来会議（任意団体）

目的

1. 地域と未来を担う子どもの集う 学童保育（放課後児童健全育成事業）における施設の生活環境を継続して改善する。学童保育を担う指導員の働く環境整備も同時に推進する。

2. 全国各地の子どもに、全国各地の森から生まれる木の建物、家具などを身近に感じて、親しみ、自然との調和、持続的発展の大切さを共に学ぶ。

子どもを通じて多世代のつながりを大切にし、自然との調和ある社会と経済の発展に寄与する。

3. 愛知県土の4割、国土の7割を占める森林や水源の持続的保全是地域と日本の課題です。森林業・製材・建築・エネルギー・環境・インテリア・木工・デザイン・流通・メディア・行政・教育研究機関・各種団体や企業・個人、ボランティア等々の協力体制によって上記1と2の目的を実現する。

発足日 2017年10月1日

設立発起人メンバー・団体企業 25団体・企業、個人

事業方針

1. すべての関係者が対等平等公平のなかで、会議の目的を推進する
2. 其々のポジションや役割を活かし、協力関係を深め、掛け算の力を出す。
3. 開かれた組織運営を基に、仲間を増やす。
4. 事業の長期継続を図る為、各メンバーが共同し経営の自立を目指す。

●木造化された学童保育

未来会議の支援により、以下の学童保育の木造化が完了・進行している。

山里学童保育クラブ（名古屋市昭和区：2019年7月竣工）

中川学童保育所（内装木質化）（名古屋市港区：2019年11月竣工）

あおぞら学童保育クラブ（名古屋市緑区：2020年7月竣工）

松栄第一・第二学童保育クラブ（名古屋市昭和区：2021年3月竣工）

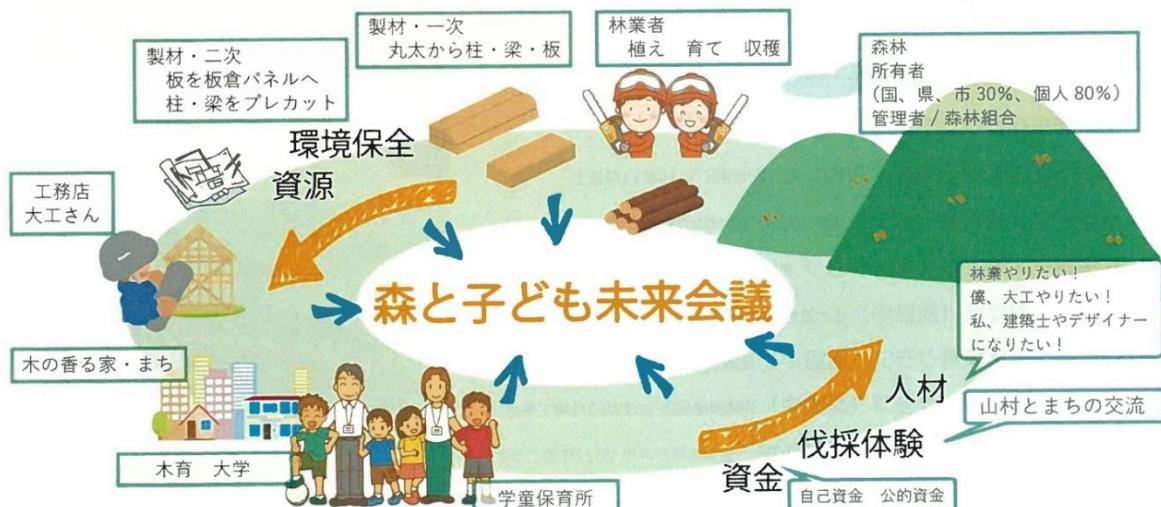
こどもの家みなみクラブ（沖縄県南城市：2022年3月竣工）

はくほう学童保育クラブ（愛知県尾張旭市：2022年3月竣工）

有松学童保育所（名古屋市緑区：2022年7月竣工予定）

グット・ビレッジあのね（愛知県春日井市：2022年8月着工予定）

森とまちをつなぐ ～愛知のしくみ、全国へ～



(洲崎燈子)

2. 木造化された3つの学童保育

取材日 : 2021年12月25日

取材場所 : 各学童施設 (愛知県名古屋市昭和区、緑区)

取材者 : 今村 豊、沖 章枝、近藤 朗、洲崎燈子、辻 康子、浜口美穂、三ツ松由有子

対応してくれた人 : 山里学童保育クラブ…松尾拓麻さん (指導員)

あおぞら学童保育クラブ…鈴木建一さん (森と子ども未来会議)

松栄第一・第二学童保育クラブ…林公平さん (指導員)

山里学童保育クラブ (名古屋市昭和区)

板倉構法による木造で建てられた初の学童保育クラブ。2019年1月に板倉構法の勉強会を実施。2月に着工し、同年7月に完成した。



● 建て替えまでの経緯

児童数が62人 (定員は40人) まで増加し、入所希望者も多い状況で、移転あるいはプレハブ施設を建て替える話が数年前から始まっていた。2017年秋から2018年秋にかけて学童保育クラブ指導員の勉強会で「森と子ども未来会議」が進める学童保育施設木造化プロジェクトについて話を聞いていた松尾さんが、学童保育クラブの保護者会に提案した。2018年の暮れ、保護者会から未来会議の東海林修さんに連絡。ちょうど、愛知県が住宅フェアなどで県産材をPRするために製作した板倉構法の展示物「あいち木づかいの家」の移築先がなく困っていたところだった。「学童保育で使ってくれるならありがたい」と無償で譲ってくれることになった。

● 資金繰りと建築 ～仲間の力を寄せ合って～

「あいち木づかいの家」を移築し、残りの部分を板倉構法で新築することで資金面の負担が減った。建築に携わったのは、鈴木さんの家を建てた名古屋市昭和区の安井工務店だった。板倉づくりの経験のある大工さんの協力も得た。大工さんは「久々に大工らしい仕事をした」と喜んでくれた。板倉構法に使う木材を加工できるのは全国に徳島と静岡の2社しかなかったが、唐澤さんと縁のある岡崎市の小原木材が「うちでやりましょう」と言ってくれたので、皆で静岡へ研修に行った。木材以外の建材も趣旨に賛同したメーカーの厚意により一部無償で提供してもらった。

お金がないので、床下の防虫・防蟻剤の塗布、ウッドデッキや外階段、表の柵づくりは保護者や子どもたちで行い、エアコンは電気店を営む保護者が付けてくれた。

延べ床面積は、移築部分は60平方メートル、新築部分は100平方メートルで、木造2階建ての施設が完成。1階と2階はらせん階段で繋がっている。多くの人の協力で実現することができた。

●どのような効果があったか

建て替える前はプレハブの施設で、冬はどれだけ暖房をつけても寒いし、夏はどれだけ冷房をつけても暑かった。また音がいろんなところで反響して子どもたちの声が聞こえづらい状況だった。建て替えた後は、指導員が朝出勤してきた時に、夏はひんやり、冬は暖かさを感じられる。子どもたちが騒いでいても隣でちゃんと話ができるし、電話の音が聞こえる。ピアノの音が優しく、思い切り弾ける。

子どもたちは床に寝転がったり、直接座ったりして木の温かみを感じている。部屋の中央の柱は「子どもの不安の解消に役立っている。「初めて来た新一年生が柱に寄りかかる。気持ちがザワザワしている時はみんな柱を触る。柱を登ったり、くるくる回る子も。だから、みんなが触る部分の色が変わっている。不安を解消する木の力がある」。

入所者はどんどん増えていき、現在は92人で、1階と2階で分けて2つの学童保育クラブになっている。入所の問い合わせはひっきりなしで待機者が出ている状況。

●周りの反応

近所の人からも「いいのが建ったね」と言われる。視察も多く、視察に来た子どもにも評判がいい。緑区のおおぞら学童保育クラブが建設を検討している時、子どもたちと一緒にここを見学し、子どもたちが親に「お父さん、なんとかしろ!!」と背中を押し、「よし建てよう」という原動力になった。

●松尾さんの心に残るコメント

未来会議発足前からプロジェクトの話聞いていて、夢があるなと思っていた。まさかその第一号になるとは・・・人と繋がることで本当にすごいことができる。学童保育はまだまだその中だけで関係が完結しているところが大きいので、子どもたちにとっても、父母にとっても、SDGsとか地産地消ということでもすごくいい経験をさせていただいた。



移築した部分は図書コーナーのある静養室に



1～2人限定の勉強スペースも愛知の木で



緑化地域に建つ山里学童保育クラブは、どの窓からも大きな木々が見える。2022年は木こり体験なども企画

(浜口美穂)

あおぞら学童保育クラブ（名古屋市緑区）

板倉構法による木造化2棟目の学童保育クラブ。2020年1月に着工、同年7月に完成した。

●建て替えまでの経緯

現在のあおぞら学童から数十m離れた場所に元のプレハブの学童があったが、地主が代替わりしたときに「土地を返して」と言われた。近くの公園への移転を検討するも、近隣住民のお一人が反対したために頓挫し、困り果てたときに現在の地主さんが都市農地を快く貸して下さることになった。

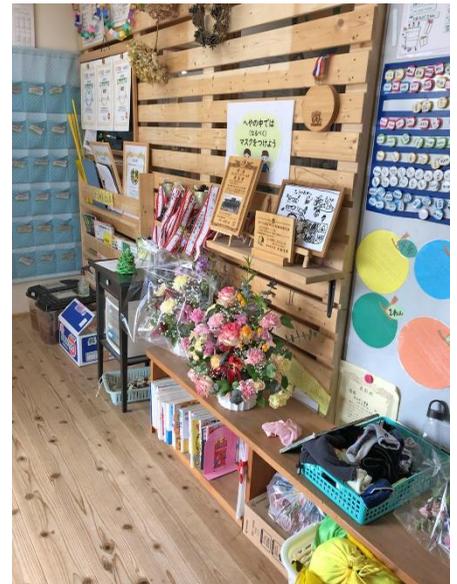
建築費が全額保護者負担となる木造化については保護者の間で賛成・反対が分かれた。そこで、保護者や子どもと一緒に山里学童保育クラブに視察に行ったところ、子どもたちが「帰りたくない」「お父さん、なんとかしろ！！」と言い、木造化することが決まった。



●資金繰り

この建物を建てるには6500万円かかっている。建築を決めるなかで、何人かの保護者と子どもが退所されたのは、今でも胸が痛む出来事である。社会の大切なインフラである学童保育所の改善を公的補助でできるようにしたいという思いが、皆の中でますます強くなった。

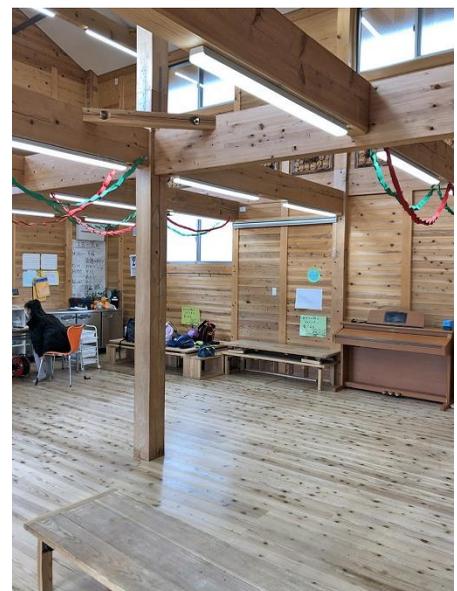
クラウドファンディングを行い、715万円が集まった。「あいち森と緑づくり税」を活用した「木の香る都市（まち）づくり事業」で1150万円の助成を受けた。3百万円相当の構造材ももらい受けた。2千万円強の外部資金を得られたので、実質負担は4千万円強だった。事前から貯金もしてはいたが、2千万円不足していたので、歴代OBのところを全て回って寄付金を募った。どーんと寄付してくれた人もいた。5～10年で、1%程度の利子を付けて返済する予定。



●設計と建築

全体の設計は保護者が考えた。どの学童の設計にも保護者や子ども、指導員が関わり、どういう間取りでどういう使い方がしたいか考えている。ここの1階は4間×6間で遊びがないが、2階にはMOKKO（都市の木質化を目指し活動している名大、名城大、名工大、日福大、椋山などの建築系・デザイン系と林学系・林産学系の学生グループ）のメンバーが子どもたちと会議をして、秘密の部屋をデザインした。ロフトもつくった。お楽しみの設計。ここは本当に秘密の部屋で、子どもたちはこういう場所が好き。

山崎真理子先生（名古屋大学大学院生命農学研究科准教授。名古屋市の長者町などで森林・林業の再生に向けた「都市の木質化プロジェクト」を実践している）や、MOKKOのメンバーの長崎さんには、山里学童保育クラブが建築を始める前に森と子ども未来会議の講師もお願いしていたが、実際にMOKKOとして動き出したのはあおぞら学童の建築が決まった時から。それからの活動は素晴らしいもので、是非つながりを継続していきたい。



天井の梁に床を張れば新しいフロアができるので、今後子どもが増えても対応できる。梁自体も増やせる。響かないので楽器も使える。ビアガーデンになるテラスもつくれる。ここの保護者なら自力でやる。

●どのような効果があったか

木造化される前のあおぞら学童では、イライラから毎日のようにケンカやトラブルがあり、泣き出す子もいた。建物から飛び出す子もいた。木造化して1年半になるが、ケンカがあったのは1回だけ。静養室もほとんど使われていない。

ここが完成したとき、木材を提供してくれた額田の山主さんたちが見に来てくれた。山主さんは自分たちの山の木がどうなるかを見ることがほぼないので、子どもたちが本当に喜んでいるのを見て、2階のテラスへ上るための立派な絞り丸太をプレゼントしてくれた。

完成直後から視察が続出した。大村県知事はここに来て心を動かされた様子で、県議会で何度も話をしてくれた。冗談のようだが、県と市の職員であおぞら学童を知らない人はいない。そして名古屋市議会が2021年度、土地を借りて運営している学童に家賃補助を出すようになり、その額も2022年度には5倍に増額された。資金的に余裕ができたので、今度は土地を購入して恒久的な施設にしようとしている。土地の購入主体は、2019年に設立した「一般社団法人 木の香るあおぞらの会」。代表理事は元保護者会会長。ソフトウェア会社の社長で、この会社は枝打ちロボットも作っている。

今後はこの学童に、地域に開かれた公民館機能を持たせたい。(取材日に打ち合わせが行われていた)公民館プロジェクトはそこにつながっている。長い歴史もあるし、これからもっと長くやっていきたい。名古屋の他の学童にも広げていきたい。ここはモデルルーム、ショールームのような存在になっている。



取材を行った2階の「秘密の部屋(図書室)」。ロフトも設置されている

… あおぞら学童に子どもを通わせる保護者の声 …

うちの子はとにかく学童が楽しくて、学童に行くために学校に行っているような感じ。私が家にも学童に行ってしまう。指導員さんのことが大好きで、多分家よりもいい居場所になっている。一軒家に憧れていたが、なかなかそういう訳にもいかず、この学童に行くのは新築の家に入れたような感じ。親が木の家を建てなければ、子どもが木に触れる機会はなかなかないので、ここで触れられるのはありがたい。長時間学童にいと、それだけ木に触れられ、良いと思う。

学童の指導員さんは親以上に子どもを育ててくれていると感じられ、とても信頼している。親と指導員さんの距離が近く、何でも話せるし、たくさん相談に乗ってもらえる。子どもに対しての目標を一緒に設定できる。

保護者の行事部が学童の公民館計画を進めていて、地域との交流を深めるための講座を開催しようと考えている。毎月1回企画をし、まずは学童内で交流を深めながら地域交流につながるものを模索している。今後、地域の方にも参加していただき、一緒に楽しむことで地域交流の場となるようにしたい。地域の方ともしっかりと気軽に行き来できる、使ってもらえる学童になるようにと考えている。

松栄第一・第二学童保育クラブ（名古屋市昭和区）

板倉構法による木造化、3棟目の学童保育クラブ。
2020年11月に上棟式、2021年3月に完成した。

●建て替えまでの経緯と資金繰り

それまでのプレハブ施設は、老朽化で雨漏り、隙間風が入る状況。夏はエアコンをフル稼働させても室内温度が35度を下回らない日も多く、毎年、熱中症になる子が出ていた。プレハブ特有の音の反響も子どもたちのストレスに。また自治体の運営費助成継続にあたり、早期に耐震性基準を満たす建物にする必要もあった。それまでは第一学童保育クラブのみで児童数35人だったが、受け入れ児童の数を増やしたいという事情もあった。

数年前から建て替えの議論は断続的に行っていたが、なかなか踏み出せない中、愛知県の2020年度「あいち木の香る都市づくり事業」に応募し、採択された。保護者会の積立金とこの事業の補助金によって、総事業費の半分以上の資金を調達することができ、建て替えに向けて一歩を踏み出した。足りない資金は、保護者・OBからの貸し付け・寄付やクラウドファンディングで調達した。

さらに経費節減のため、シロアリ防除のためのホウ酸塗布、テラス・靴箱や外の門扉・柵づくりは、保護者や子どもたちで行った。

同じ昭和区にある山里学童保育クラブとは様々な繋がりがあり、話を聞いたり、アドバイスをもらったりした。



●どのような効果があったか

建て替えを機に、1階と2階に分けて、第一・第二学童になり、合わせて36人になった。子どもたちは木の温もりに包まれ、以前は毎日のようにケンカやトラブルがあったが、建て替えてからは半年で1度しかケンカをしていない。応募者も倍増以上で、当初2階は学習塾に賃貸することも考えていたが、来年度は入所希望者が多いとお断りする可能性も出てきた。

●地域との関わり

地域の公民館的な役割も目指している。取材日も地域の老人会が2階を使用していた。和太鼓の練習会なので普通なら隣家から苦情がくると思うが、全く音漏れしないので驚きだった。

※参考：松栄第一・第二学童保育クラブのウェブサイト・クラウドファンディングのサイト

… 松栄学童に子どもを通わせる保護者の声 …

近隣で交流のある山里学童保育クラブの木造建て替えが契機となって機運が高まった。その後に建て替えたあおぞら学童保育クラブから、法人化や資金計画、役割組織のつくり方など、様々なアドバイスをもらい、保護者で共有してプロジェクトを進めた。保護者会の中に「仮住まいチーム」「一社（一般社団法人）化チーム」「建物チーム」「資金調達チーム」「契約書チーム」などの組織をつくり、全家庭が何らかの形で建て替えに関わった。どの家庭も「我が事」で動いていた。

学童は単なる子どもを預かる場所ではない。お兄ちゃんやお姉ちゃんなど学年の違う子どもが関わり合い、保護者も自分の子以外の子とも関わる。子どもの人格形成に影響する場である。

もともと、松栄はおやつを手作りしていたが、建て替えで厨房が広くなり喜んでいる。



遊び心で曲がった松の木をそのままに



リモートワークブース（子どもたちの個室）も愛知の木で



ホワイトボードも木枠でオリジナル

(浜口美穂)

3. プロジェクトに関わってきたさまざまな人びと

鈴木建一さん

森と子ども未来会議 発起人／日本板倉建築協会 賛助会員／額田木の駅プロジェクト 常任委員／一般社団法人奏林舎 設立社員／大宝運輸株式会社 取締役営業推進本部長

取材日 : 2021年12月25日
取材場所 : あおぞら学童保育クラブ
取材者 : 今村 豊、沖 章枝、近藤 朗、洲崎燈子、辻 康子、浜口 美穂、三ツ松由有子



● 生い立ち

祖父は刈谷で製材・建築業を営んでいた。自分の名に建が入っているのは祖父の思いから。家には製材機、丸鋸や鉋があった。丸太の土場もあり、丸太は額田の山を広く持っている眞木宏哉さん（岡崎森林組合長）のおじいさんから買っていた。銘木を出してくれた。川の下流で家を建てるなら、一番近い木材の供給地が額田だった。

子どもの頃から自転車が好き。小6の時に茶臼山まで自転車で往復しようとしたが、帰りに力尽きて勘八峡に着いたところで日が暮れ、橋の下で野宿した。矢作川は自分のエリアだと思っている。

日本福祉大学に在学中、二夏学童で指導員のバイトをした。楽しいがとても大変な体験だった。子どもたちにプールに沈められて死ぬかと思ったこともあった。

● 家を建て替える

卒業後、自転車部品メーカーを経て、姉が勤めていた運送会社に転職。祖父の建ててくれた家に住んでいたが、地盤沈下で家が傾いて隙間ができ、目の前に13階建てのマンションが建ったこともあって、家を建て替えることにした。せっかく祖父が建ててくれた家を建て替えるのだから、地元愛知の木材を使い、自分で製材、建築その他をしようと思い、いろんな勉強会に出るようになった。

2013年、名古屋の木工機械展の講演会で建築家の東海林修さん、岡崎市額田地区で林業を起業しようとしていた唐澤晋平さんに会った。その後急激にネットワークが広がった。東海林さんから木組みを活かし、柱と柱の間に板を落とし込む板倉構法を教えてもらった。正倉院に代表される、日本古来の木造建築技術。自分の家はタッチの差で板倉にはならなかったけれど、板倉構法は本当にいいなとずっと思っていた。



取材風景（左が鈴木さん）

● 学童保育との再会

運送会社の組合は労働者側も経営者側もお互いに知恵と汗を出し合う関係。年に3～4回、建交労（1頁参照）の労使が集まる勉強会がある。2017年に初めて女性が委員長になったが、この人は学童保育指導員だった。

名古屋市は240の小学校があり、180の学童保育のうち約7割の124棟がプレハブである。名古屋市は、保護者が3年以上借りられる土地を見つけてきたら、プレハブを貸与するという方式を採用している。最初（45年くらい前）はちゃんとしたプレハブが貸与されていたが、経費削減でだんだんと安普請になり、冬は寒く夏は耐えがたいほど暑く、子どもの声や雨音が反響してうるさく、立て付けが悪いなど、子どもが過ごすのによくない環境だという。地域からも迷惑施設扱いである。

2017年の春、勉強会後の懇親会で委員長に板倉構法の紹介をして、東日本大震災の震災復興住宅を板倉でやったら、住み心地がいいので転居先に移築もされたという話をした。ふつうの木造住宅だと移築できないが、板倉構法の建物は分解して移築できるので、「学童保育所は板倉で建てられる！」という話になった。

●学童保育を木造に

2017年夏から秋にかけて「森と子ども未来会議」を設立した。これまでに4棟の学童保育（山里学童保育クラブ、中里学童保育所、あおぞら学童保育クラブ、松栄第一・第二学童保育クラブ）を木造化・木質化した（3～8頁参照）。木材は唐澤さんの立ち上げた一般社団法人奏林舎が中心になって提供。製材は株式会社しらいが行い、板倉のパネルは小原木材が作製した。いずれも額田の団体・企業。最初に木造化した山里学童保育クラブは、自分の家を手がけた安井工務店が、赤字覚悟で施工してくれた。

現在3棟（有松学童保育所、はくほう学童保育クラブ、こどもの家みなみクラブ）を建設中で、2022年内に竣工予定である。これら3つの学童保育所は、あおぞら学童を見に来た保護者が「やっぱりこれしかないわ」と言って、木造化が決まった。

沖縄のこどもの家みなみクラブでは、150年生のチャーギ（イヌマキ）という針葉樹を地主さんから頂き、それが玄関から2階まで突き抜けるような設計で、大黒柱の1本になっている。東海林さんは設計が上手で、それぞれの学童の使い方に合った建物を考えてくれる。

学童の木造化は、保護者や子ども、指導員も設計に関わり、経費削減のために、やれるところは自分たちでやる。外構の木の塀やウッドデッキ、外壁塗り、土台梁のシロアリ除けのハウ酸塗りなど。学生団体MOKKOや、学童のOB、OGも手伝ってくれている。



子どもたちも建物づくりをお手伝い
（あおぞら学童保育クラブ）

●子どもと指導員、地域への影響

木の建物で過ごす子どもたちは笑顔が多くなった。室内にいるのがいやだから外へ行きたいという子が減った。室内遊びの幅が広がった。それぞれの子が遊びに集中できるようになった。靴下を脱いで裸足になる子が増えた。自己決定、自己選択の幅が広がり、過ごす場所、過ごし方が豊かになった。

皆がいる部屋でピアノを楽しめるようになった（以前はピアノは防音室にあった）。

指導員にもいい影響があった。空間設計や遊具の配置、園庭の整備に関わることで、言葉で子どもを動かすよりも、環境で子どもに働きかける大切さという視点を持てるようになった。また、指導員もプレハブの時と違い、中にいるのが苦しくて別室に逃げるのが殆どなくなり、自分の職場に少し自信が持てるようになった。そして、建物と、そこから出てくる子どもたちや職員の表情を見て、求人広告を出す前に、指導員のアルバイトをしたいという応募が複数来るようになった。

木造になった学童では子どもと保護者、地域ががっちりつながる。木造化した学童は、絶対に地域のために必要という思いがある。町内会長は1年で変わるが、子どもを1人預ければ最低6年になる。6年は短いようで長い。地域に埋もれてしまった親同士のつながりが作れる。子ども同士も同じで、弟や妹ができる。いま、いなかでも都会でもこういう世界は貴重な財産。こういうところで育った子は多分、心の病になりにくい。丈夫になる。

子どもたちには学童の建物をきっかけに、山のことも知ってほしい。いい山も悪い山も両方見てもらいたい。間伐の効果を知り、木こり体験もして欲しい。そしてヤットコなどの遊具、本棚や椅子づくりなどで木に親しんで欲しい。

◆これからの夢

学童の木造化には、どうしても頭金で3000万とか4000万とか出さないといけない。森と子ども未来会議を法人化し、1～3億くらいの資金を持っておけば、建築資金を学童へ融資し、その後は行政から家賃補助が出るので、回収していくことができる。そういう母体をつくらないといけない。そうすれば加速度的に、年間3棟、4棟、5棟と建て替えられる。お金の心配をせずやっていけるようになる。名古屋だけでなく、愛知県内、全国で進めていきたい。



あおぞら学童保育クラブの日常



学童木造化勉強会（あおぞら学童保育クラブにて、左：2021年4月10日、右：同年7月3日）

（洲崎燈子）

東海林修さん

東海林建築設計事務所代表

1954年山形県生まれ。1976年に名城大学理工学部建築学科を卒業し、MATO建築設計事務所入所。1981年、東海林建築設計事務所開設。趣味はスキューバダイビング（インストラクター）、スキー、登山。

取材日：2021年12月26日

取材場所：季の野の台所（愛知県美浜町）

取材者：浅田益章、今村豊、近藤朗、洲崎燈子、辻康子、三ツ松由有子



●なぜ木の家は気持ちがいいか

東海林建築設計事務所は、木造住宅を専門に設計と監理を行っている。「木の家は気持ちがいい」と言われるのには、以下の3つが大きく関係している。

1) 調湿効果

木材の調湿能力は、日本特有の高温高湿の気候風土に最適な室内環境をつくってくれる。古来の建築材料の土や紙も同じである。木の調湿機能は表面の2~3mmの厚みで行っている。例えば120mm角×3mの柱だと、なんと牛乳ビン一本分の吸湿効果がある。

2) 断熱効果

木の家では、調湿効果が断熱効果とあいまって心地よさを増す。杉材には10kgのグラスウール程度の断熱効果があるとされている。杉は特に、中の道管の多さから断熱効果が高い。

3) 防火性能

壁に通す3cmの杉板の裏側に、耐震性能を出すために2.4cmの杉板をクギ打ちすると合計で厚さ5.4cmになる。これで防火性能があると国が認めてくれた。木は0.6mm/分の燃焼スピードが確認され、この厚さは燃え抜けていかない厚さになる。



板倉造りの住宅。左：季の野の台所（「あいち木づかいの家（14頁参照）」2棟目）での取材風景。左から3番目が東海林さん。右：東海林建築設計事務所HPより。

●建築を志す

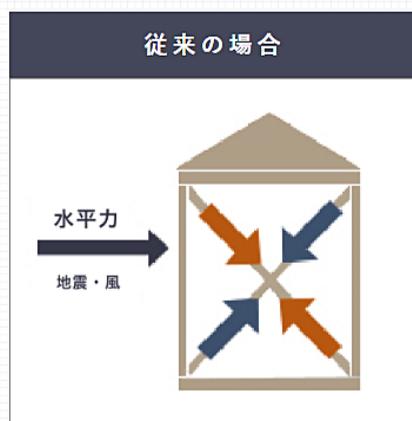
出身は山形県。先輩が通学時に図面を描くとき使うT定規を持っている姿に憧れて、山形県立鶴岡工業高校建築科に入学し、大学は、当時（1972年）建築科があり、推薦入学枠のあった名城大学の理工学部建築学科に進学した。神谷義夫氏に師事し、1976年MATO建築設計事務所（名古屋市）に入所した。この事務所がシビアな木造住宅を設計する事務所だった。

5年後の1981年に独立し、東海林建築設計事務所を名古屋市内に開設しました。もともと木造建築だけをやると思っていた訳ではなかったのですが、医師をしているお施主さんとの出会いにより、医師は専門を決めているのに、建築士は専門職を決めていない事に気付いた。木造建築専門にしたら、気が楽になり、仕事がやりやすくなりました。

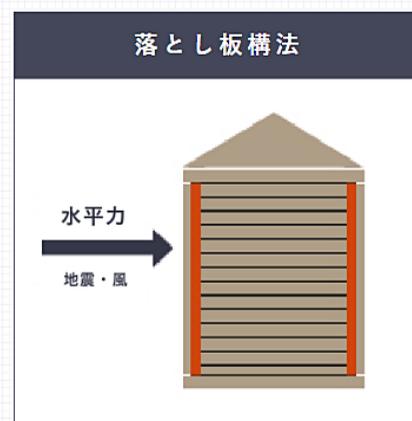
●伝統構法へのこだわり — 板倉造りとは

1995年の阪神大震災の一月後にスタッフと神戸に出向き、自分が昨日まで設計していた「筋交い（又は合板）」や「金物」でつくられた木造建築が無残に壊れている光景を見て、今までの設計活動が全否定されたようなショックを受けた。こうした構造は、地震や風など自然の力に対して突っ張った効果を出そうとする「力対力」の構図をつくる（在来工法）。それに対し、伝統構法の建物はしなやかに揺れ、地震や風のエネルギーを外へ逃がす柔らかな構造をもつ。木の最大の特色でもある、木がめり込む柔らかさを生かしている。

阪神大震災の後、民間や大学、国が木造の研究、実験を繰り返すようになり、伝統構法の「耐震性能」や木造のねばりが立証され、今まで大工さんの技や勘にたよっていた長所の殆どが数字で表せるようになった。柱や土台、梁等の軸組に溝を掘り、そこに厚さ30mmの杉板を落とし込むことを、落とし板構法（板倉造り）と言う。伊勢神宮にも使われているこの構法は、地震や風などの水平力に対して、木材が唯一粘りを発揮する横圧縮で吸収する。同時に、軸組の中に据えられた溝の中に杉板が納められているため、脱落や剥落などの構造体の耐力の急激な減少につながる破壊を生じない。自分が木造建築の中でも板倉造りに特化していくことについては葛藤もあったが、これからは板倉構法と土壁の2本柱でやっていこうと決意した。2014年には日本板倉建築協会の立ち上げに関わり、理事に就任しました。



力が加わる点が集まる為、損傷が大きくなる。



大きな地震が来ても分散されて力が加わる為、損傷は比較的小さくなる。

水平力に強い板倉造り（東海林建築設計事務所HPより）

●鈴木建一さんとの出会い

鈴木さんとは、2013年の木工機械展の前にもお会いしていた。それは名古屋で住宅や木にまつわる良い活動をしている「あいちの木で家をつくる会」の勉強会や会合の場だった。参加者の多くはラフな格好をしていたが、鈴木さんは唯一、いつもスーツを着ていたので目立った。懇親会でお話するようになり、板倉のパンフレットをくださいと言われ、お渡ししてから深いお付き合いになった。2017年に鈴木さんの組合の勉強会で、その委員長から「学童保育所を板倉で建てられるのではな

いか」という話が来たときは、その日のうちに即答で了承し、鈴木さんと二人でアピールしていく意志を固めた。

学童保育の木造化には、特に名古屋市や愛知県の学童保育連絡協議会のさまざまな方々に関わって頂き、こうした会で、板倉の学童は長寿命で省エネルギー効果が高く、森にいる癒し効果が得られることをPRさせてもらい、紆余曲折はあったが賛同を頂くようになった。

また、鈴木さんとともに、奏林舎の唐澤晋平さんとお会いしたことがきっかけで、それまで板倉の木材は徳島のものを利用していたが、愛知県産材も使うようになった。

2015年から1年に1棟、県産材利用促進を目的としたモデルハウス「あいち木づかいの家」を手がけている。県から「いろいろな構法を使って」と言われ、板倉やCLTなどを使った年もあった。展示後は行き先がなく、チップになってしまうこともあり、2017年につくった3棟目の木づかいの家は山里学童に移築され、建物の一部になった。建物の高さが低かったが、図書室にしたら天井の低さが好評だった（4頁参照）。

木造化された2棟目の学童保育であるあおぞら学童では、板倉の建物の中で走り回る子どもたちの笑顔を頭に浮かべながら設計を行った。子どもたち以上に指導員さん、保護者さんの行動力に驚いた。困難のひとつひとつを切り崩し、平地にしていく力は、これからの学童運営への影響や子どもたちへのよい見本になっているように思った。



建設中のあおぞら学童のテラス（左）と「秘密の部屋」（右）
（あおぞらクラウドファンディング通信HPより）

●板倉の学童保育を全国に

板倉については、木の建物の性能としてはこれ以上のものはないと自負している。板倉をもっともっと知ってほしいし、他の設計者にもやってほしいと思う（やり方は教えます）。今までは板倉×住宅という形だけだったが、板倉×学童も住宅設計の延長と思っている。住宅は1（施主）対1（設計士）の関係だが、学童は何十人、何百人対私の関係で、市や県、全国の学童保育連絡協議会がつながって情報が広がることも、波及効果が大きい。板倉の学童保育施設が沖縄にもできるので、いずれは自分の故郷のある東北にもつくりたいという希望を抱き、アピールを続けていくつもりです。

（洲崎燈子）

唐澤晋平さん

一般社団法人奏林舎 代表理事、額田木の駅プロジェクト
事務局長

取材日 : 2022年2月18日
取材者 : 三ツ松由有子



●学童保育木造化プロジェクトと関わるきっかけは？

2013年11月、額田への移住を決め、準備のために日本木工機械展に参加。そこで鈴木さんと出会ったことから始まった。

私は2009年から宮城のくりこま高原自然学校で子どもたちの自然体験プログラムを担当していた。くりこまで様々な経験をするうちに、環境をベースとした地域活性化に取り組みたいと考えるようになり、2014年、地元愛知県の額田に戻ってきた。移住して間もないころ、矢作川流域圏懇談会・山部会に参加。再び鈴木さんと出会い、あまりの偶然に驚いた。鈴木さんは何年も前からNPO法人中部猟踊会〈人と野生動物の共生を目指す団体〉の活動で頻りに額田へ来ているというのだ。その後、鈴木さんも木こり活動を開始し、「額田木の駅プロジェクト」や奏林舎立ち上げ前の「里山樹働隊」でいっしょに山の課題に取り組んできた。



里山樹働隊での搬出活動

●林業への想い

林業を始めて非常にもどかしく思うのは、私たち木を伐るものに対しては税金（補助金）で対価が支払われるが、木を植えて育ててきた山主さんにはお金が回らないことだ。日本では、昭和39年に関税が撤廃されて以降、木材を使う量が減っているのに外材を入れ続け、例えばスギの値段だったら、一番高いときは1立米約4万円だったのが現在（令和3年5月時点）1万2~3千円、ヒノキだったら1立米7万6千円だったのが今では1万5千円~2万円と、一番良いときの5分の1くらいになってしまった。これだけ丸太が安くなれば、山の手入れをしても採算は合わない。山主さんが林業に関心を持たなくなるのは当前だ。よく、担い手がいなくなったから日本の林業は衰退した、と言われるが逆だと思ふ。丸太がまともな値段で売れるならみんな続けている。儲からないからやる人がいなくなり、結果的に担い手がなくなった。

そんな林業をなぜ自分は選んだのか。宮城で3.11を経験したことが大きいと思う。資本主義的な考え方ではなく納得のいく仕事をして、自然の豊かさを感じながら生きる暮らしをしたい。そんな想いから、環境保全と地域活性化の両方に資する仕事として林業を選んだ。だから、木を伐るだけでなく、薪の事業で化石燃料を減らす道筋を探り、チャンスがあれば、薪ボイラーの熱供給等も手掛けたい。また、障がい者支援団体と連携して生きづらさを抱える人の受け皿になったり、退職した人の生きがい・やりがいの場づくりなど多様な視点で取り組み、将来世代に豊かな森を引き継いでいきたいと思う。

●このプロジェクトに対する想い

額田はもともと林業が盛んだった地域。林業が廃れ、少子高齢化が進んでいる現状を何とかしたいと考えている方は多い。2015年に木の駅プロジェクトが始動したとき、地域の方々の反応はとて早く、当初想定した以上の材を出している。こうした活動を通じ、岡崎市森林課、額田林業クラブ、ぬかた商工会、森林組合、森林ボランティア団体など多くの方々・組織と連携して地域のネットワークができてきた。山側へお金を返して植林できる体制にはまだ遠いが、この春、岡崎に木材の地域商社ができ、木を伐って製材加工、そして販売までつなげるレールづくりも始まろうとしている。人口が減り、間違いなく住宅需要も減っていく中、学童保育所のような公共的建物の木造化をいかに進めていくかが問われている。本当に学童木造化プロジェクトの意義は大きいと思う。あらゆる人の思いがつながり、2棟目、3棟目…沖縄にまで広がって7棟目の完成も間近だ。確実に広がっていることを本当にうれしく思っている。

また、2018年に奏林舎を立ち上げ、「林業振興—地域づくり—エネルギー生産—教育フィールド」という4つの視点で環境問題と額田地域の活性化に寄与することを目指している。学童保育所木造化プロジェクトでのつながりから、2020年11月に名古屋のあおぞら学童保育所、2021年8月には春日井のグット・ビレッジあのねの子どもたちを対象に「木こり体験」を実施した。額田の森の「教育フィールド」としての活用である。まちの子どもたちや保護者に身近な山や木の魅力、気候変動問題・暮らしの質向上に果たす役割を伝えるプログラムを続けていったら、将来、地域材を使った建築を選択する人、林業を志す人も出てくるだろう。皆で学童保育所木造化プロジェクトを大切に育てていきたい。



2021年5月実施「学童木造化勉強会」での森の健康診断体験



2021年8月 グット・ビレッジあのね木こり体験



木こり体験には小雨模様にもかかわらず40名以上が参加。グット・ビレッジあのねの子どもたちと額田の森で記念撮影

(三ツ松由有子)

小原 淳さん

小原木材株式会社代表取締役社長、西三河林材団体連合会会長、NPO法人アースワーカーエナジー（天使の森プロジェクト）理事長、愛知県生態系ネットワーク協議会副会長

取材日：2022年2月2日
取材場所：小原木材（愛知県岡崎市）
取材者：沖章枝、近藤朗、高橋伸夫、三ツ松由有子



● 生い立ちと経歴

115年前に、宮大工をしていた祖父が独立して創業した会社が今に繋がっている。蒲郡市の竹島へ渡る橋や岡崎市の殿橋などの施工も手がけている。今と違って当時は木造で、殿橋の上は市電が走っていた。

1951年、社長の長男として誕生する。ある意味で何不自由なく育った。幼い頃から身近に木があり、祖父の影響もあって寺社仏閣など木造建築物を美しい素晴らしいと感じてきた。幼児期に父と一緒に山へ行き、足を滑らして転落したことがあった。この時木の根っこを掴んで助かったと感じていて、“私の命は木に救われた”“木を大事にしなくてはいけない”とずっと思ってきた。

大学から東京へ出て自立し、事業を始めたが、23歳という年齢で上手くいかなくて3年間程会社勤めもした。27歳の時、独立して創業。“衣食住”すべての分野の商品開発などのコンサルタントの仕事で、当時はまだこうした分野は先駆的で、仕事は結構多かったし私に合っていた。ずっと東京で仕事をしてきたのは、情報量が非常に多いことと一つの地域に限らない全国的な展開をしたいと考えていたので都合が良かった。

● 父の強い遺志に報いて岡崎に戻る

「会社を継げ」と、ずっと言い続けてきた父が2000年に亡くなった。死ぬまでいわれ続けるのかと思ったが、父があって私があるわけで、東京で好きなことばかりをやってはいけないのではないかと考えて戻った。父は「地方も見るように」、と伝えたかったのではないかと受け止めている。

2002年、小原木材株式会社 社長に就任。

この時、2つのショックがあった。一つは、輸入材を主に取り扱っていたこと。もう一つは社内自動販売機があったこと。外材については、日本の森を守らなくてはという気持ちでいたし行動もしてきた。地球全体のバランスを考えると、いま外材を使っている場合かという強い思いがあった。

自動販売機については、人が生きていく上で大切な感覚を駄目にする。人は必要な時に必要なものだけを買うのが大事なことで、こうしたことで人間は物を大事にできるようになると考えている。衝動的なことをさせるのが自動販売機と思っている。このことは社長に就任して直ぐに社員に伝えたが、みんなが「いいよ」というまで待って6年近くかかった。



同席しておられた木材部長・建築部顧問の都築俊夫氏にこの時どのように感じられたか伺ってみると、「今まで当たり前と思ってやってきた事と違っていたが、時間が経つにつれて社長の意見が正しいと分かった。今社会全体がそのように変わりつつある。今はこうしてきて良かったと思う」と言われた。

国産材だけに切り替えても、コスト面でとても外材に太刀打ちできなかった。会社が成り立たなくなつては困るので、価格は高くなるけれど、木造の難点といわれるところに手を加えて付加価値をつける方法を採用した。国交省の認定を取って、火に弱いという弱点をカバーした不燃木材、防腐防蟻対策をした無垢材、木材を染色することで特殊な用途も可能にする染色木材の設備を導入した。勿論、従来のノーマルな国産材の加工もしているが、価格が高くなってなかなか難しい。自然を守りながら、山に木が沢山ある現状で国産材を多く使うような理想体制をつくろうと思っているが結構難しく、全国の課題でもある。

●森を守ろうとした原点

仕事は順調だったけれど衣食住、ただお客様の要求に応じたモノづくりをしていて良いのだろうかという疑問を抱くようになった。30代になって海外へ仕事の幅を広げたので外国へ行くことも多くなりわかつたのが、ヨーロッパや他のアジアの国々では、日本ほど余分なものを買ひ、消費をしていないということ。世界の人口は78億人と言われているが、年間で300億着の衣類が破棄されている。衣類だけではなく食べ物や、住宅さえも作っては壊して捨てている。日本は人口比率に対して捨てるものが多過ぎる。経済人としてこうした日本の在り様は経済が破綻すると考えた。自分で自分の首を締める生活を改め見直すための軸がいると考えた。1991年NPO法人を立ち上げ、環境と産業のバランスを保つためにはどのようにすればよいか考える、異業種や世代を超えたシンポジウムを始めた。「植物分類学から見た生態系の現状と都市・建築開発の関わり方」等々講演会の企画運営を行った。

1999年に東京・多摩で、山頂まで人工林になっている頂あたりを自然林に戻す活動“天使の森”を始めた。森林政策は室町時代に始まって江戸時代に確立されたといわれているが、山の管理が行き渡っていた頃は、「奥山山頂付近は自然のまま残そう。その下の部分は大地から人間が借りて使わせていただく」と考えられていた。山頂付近は自然林が残されていて水源地として豊かな山の機能が保たれていた。その後、木材の需要が増えるなど様々な要因によって、全国いたるところで禿山が目立つようになった。戦後直ぐに拡大造林政策によってただ植えればいいと、山頂付近まで植林をして人工林にされてしまった。ところが間もなく、木材は扱いやすい外材に取って代われ木の需要が減った。手が入れられず育った人工林が山にいっぱいある状況が現在の森林の問題である。人間がやったことは反省をして人間の手であるべき姿に戻さなくてははいけないと考えた。それが“天使の森”の活動で、岡崎市でも10年前に始めた。

●東海林さんの声かけ「一緒に学童保育木造化プロジェクトをやりたい」

2017年に私が担当した「岡崎市産材付加価値材による事例説明会」に東海林さんが見学に来られた。セミナーが終わったあと残ってお声をかけていただいた。考え方が一致して、やることになった。この時、事例紹介した岡崎信用金庫 城下町支店は「第28回愛知まちなみ建築賞」で今年度の大賞を受賞している。

実は、板倉づくりは17、8年前に手掛けている。木という単一の材料だけで美しい素晴らしい空間ができる。寺社仏閣の建て方と同じである。木だけという建築物なのに建築法や消防法で認められている。学童保育所は公共系の建築物である。板倉づくりは通常の3倍の木材を必要とするので、国が法改正をして間伐材を沢山使ってほしいとしている政策にも適うことにもなるし、CO2削減という国際的問題解決策の一つになると考えた。

20年前に岡崎市で木造の私立幼稚園を企画し、その後も関わってきた体験から、木の空間は子どもたちの精神的な安全性が違ふことや、インフルエンザなどのウイルス性の病気にかかりにくく、休園率が以前の10分の1になったという効用も分かっている。取り組むにあたっては実際に製作している静岡のケンセイホームへ見学に行って、岡崎産材を小原木材で板倉という加工材（厚み30mm、幅135mm、の杉板）にしている。柱と土台は桧。

●学童保育木造化プロジェクトへの想い

取材者： 学童保育木造化で、山、里、海へのつながりという同じ想いの方とつながりましたね。

小原社長： 板倉づくりの建物は、子どもたちの精神性の安定が図れる、そこにいると心地が良いというだけで済ませてはいけないと考える。板倉の建物を通して私達は森とどう共存するのという原点的なところに立たないといけない。森によって人は生かされていることを子どもたちに伝えたいと思う。生き物に欠かせない水の水源は山にあり、ミネラルなどの栄養素も森にあり海の生き物を育てている。500万年前、人類は森から生まれたといわれている。ネズミに似た生きものが森で誕生して、年月を経る間にウイルス感染して変異を繰り返すうちに人類に近いものになっていったといわれている。無垢の木・板倉を通して私達は森によって生かされていることを感じて取って欲しい。

都築部長： 今のところ名古屋市内の学童保育所が中心になると聞いているが、プレハブやコンクリートの建物と違うけれど、どうして違うの？ どうして居心地が良いの？ と考えるとところまでいかないといけないと思う。都市の子どもたちに良い環境が与えられることに共感している。私達の仕事子どもたちの将来のために役立つ事を願っています。流域全体に広がっていくといいですね。

●森の未来のために

「あなたの職業は何ですか」と問われそうだけれど、今、子どもの学校を作ろうと準備を進めている。意識を変えることをやっていかないと変わらないと思う。大人は「まあいいよ」という言葉が好きだ。大人になると妥協してしまうが、素直な時に素直に人間のあり方や生き方を身につけないといけない。その為にも子どもの教育は大切と思う。岡崎市には48校の公立小学校があるが、全部の4年生が一度は体験、利用できるようなNPO法人の“緑の学校”の再来年開校を目差している。場所は2010年に閉校した額田の小学校を利用する予定。森とどう共生するか、森がなぜ大切なのかということ学ぶには直接森を見て欲しい。学校の近くには、2012年岡崎市から標高550mの宮崎財産区の山地13.57haを借り受け、“天使の森”100年プロジェクトとして山頂を含む4haを自然林に戻す活動を進めてきた場所がある。この山頂からは海が見えて、山中には湧水もあり、男川の水源の地の一つになっている。山、川、里、海の繋がりがよく分かる。ここで子どもたちに森によって生かされていることを体感してもらいたい。

この近くの地域では、ここを一つの小さな地球と想定して、人がこうした方が良くという生活、農業・林業などの産業で子どもに嘘のない村のモデル“地球村”（仮称）作りを考えている。全国では間伐材の70%が生かされずに切り捨てられている。板倉といえども、規格に合った厚みの材料にするために沢山のごみを出している。木は余すところなく全て活かすことを考えたい。間伐を例にとると、作業がしやすい山の下の方の木を切りがちになっている。間伐適合の立木の選定をしたり、用途に応じた木材を山から調達するなどして、本来の豊かな自然の森の管理ができるような仕組みや人づくり、教育をしたいと考えている。



奥山プロジェクト | 里山プロジェクト | 人里プロジェクト | 里海プロジェクト | 海洋プロジェクト | 河川流域連携プロジェクト

日本列島のほぼ中心地にあたる愛知県岡崎市雨山町・東河原町の13.5haを奥山のモデル地として岡崎市財産区より借り受けています。矢作川・乙川の水源地の1つであるこの地は縄文遺跡も発掘されるなど古くから人類の発祥の地として歴史を刻んで来ました。今日、三河湾に注ぐこの河川流域は産業も発達し、日本の中核を成す地でもあります。この地に奥山から海洋へと人類も含めた環境循環型地域を目指してモデル事業を進めています。



白井仁士さん

株式会社しらい専務取締役、額田木材製材業組合組合長

取材日 : 2022年1月21日
取材場所 : (株)しらい(愛知県岡崎市)
取材者 : 近藤 朗、三ツ松由有子



●学童保育木造化プロジェクトと関わるきっかけは？

奏林舎・唐澤さんの紹介。2014年に唐澤さんが額田へ来てくれて、木の駅プロジェクトや森と子ども未来会議の活動を始めてくれた。地元の関係者は当初から大歓迎。若い彼が額田へ来てくれたことに対し、「環境を守るという高い志を持った上で、よくぞこの厳しい業界に来てくれた！」と皆が期待している。その唐澤さんから森と子ども未来会議の相談をうけた時も、私たちはずっと木造建築を推進してきたので、『名古屋に地域材を使う良さを理解してくれる人たちが現れた！』と喜び、しかも、従来構法の中で最も多く木を使う建て方ということで本当にウェルカムだった。

プロジェクトを推進する鈴木建一さん、建築家の東海林さんたちが、額田の材は伐りだしから搬出、製材加工までがちゃんとつながっていて、どこから伐りだした材かちゃんとわかることの価値を評価してくれた。大変ありがたいことだと思っている。

●家業を継いだことについて

額田の山は、比較的手が入っていると思う。額田林業クラブ(自伐林業家の会)があり、木の駅プロジェクトもある。中学校には『学校林』があり、毎年、林業クラブと一緒に60人くらいの子ども達が木を切って、ベンチづくりを行っている。地域でこうした活動を大切にしているが、時代にはあがえない。林業はすたれ、かつては20~30軒あった製材所は今ではウチを含め4軒になってしまった。

私がこの製材所を継いだのは20年ほど前。大学卒業後、自動車関連会社で5年ほど働き、実家へ戻ってきた。この地域にもプレカット工場がどんどんできた頃で、日本の林業・製材業としても一番悪いときだった。そんな仕事をなぜ、継ごうと思ったのか？ 確たる理由は思い当たらない。ただ、やり始めて気づいたのは、山に関わるこの仕事、さらに言えば第一産業の重要性。子どもが生まれ、家の前を流れる男川(おとがわ)で息子たちが川遊びをする姿を見て、さらにその思いは強くなった。目の前の清流でプライベートビーチながら川遊びができるこの環境自体が『宝』である。そして、かつては当たり前であった川遊びが贅沢になったことへの疑問を持つようになった。

●このプロジェクトに対する思い

サラリーが良く、安定した会社勤めを辞めてまで、なぜ製材業を継いだのか？ 今になって振り返ると、効率を追い求める自動車産業に違和感を持ったからかもしれない。そんな流れで、自分のような小さな製材業は、山や川の環境保全につながる仕事なのだと自負を持ってやり続けてきた。そこで出会った森と子ども未来会議の活動が、自分が考えてきたことを裏付けてくれたようで嬉しく思っている。

今の私たちの社会は、「もっと便利に!」「もっと速く」「もっとたくさん!」ということをやりがちで…そして、私たちは横着になりすぎて、安いエネルギーや安い労働力を求めて誰かや自然に負担をかけ、いろいろなものを壊しすぎてしまったんじゃないか…壊してしまった自然や文化は、壊した時間の何倍もの時間をかけないと取り戻せない。そういうことにそろそろ気づき、子どもたちのため、横着しないやり方を皆さんと一緒に取り戻したいと思う。

横着しないやり方で大切なことは「適材適所」。製材の腕の見せ所も、木の性質を見ながら、さらに言えば同じ樹種でも1本1本異なる木の状態を見ながら適材適所で材を創っていくこと。木を伐る人から私たち、設計士や工務店、施主さんも含めてみんながつながっていれば、適材適所で木を使い、本来のやりがいある仕事ができる。しかも、それが子どもたちの快適な住空間づくりに役立って、山を守り、環境を守ることもつながっていくならこんな良いことはない。

森と子ども未来会議の活動で、今、矢作川流域の森と都市部をつなぐ「ひな形」ができつつある。森づくりにお金を回すところまではまだまだだが、川上から川下へ木が流れ、まちの人が森に関心を持つ循環が生まれている。この「ひな形」を皆で育て、外から安いものを持ってくればいい、使えばなしで自然から収奪しっ放しでいいという価値観を変え、子どもたちにとって良い選択、少し先を見た判断ができる世の中にしていきたい。自分のこれからの人生をそのために使っていきたいと思っている。



2020年あおぞら学童保育所・完成見学会にて
額田木材製材業組合より木のおもちゃを贈呈



2020年11月、あおぞら学童保育所の子どもたちが額田を訪れ、木こり体験と製材体験
@株式会社しらい



2022年1月21日 取材風景 @製材所横の休憩室
ドラム缶新ストーブが足元から温めてくれる

(三ツ松由有子)

安井 健さん

株式会社安井工務店 代表取締役社長

取材日 : 2022年2月1日
取材場所 : (株)安井工務店 ショールーム
(愛知県名古屋市昭和区)
取材者 : 沖 章枝、近藤 朗、高橋伸夫、三ツ松由有子



●学童保育木造化プロジェクトと関わるいきさつは？

約10年前、鈴木建一さんがご自宅の建て替えを当社に発注してくださったことから始まった。チリウヒーター（太陽熱温水器のパイオニア）さんからの紹介である。鈴木さんは、製材・建築業を営んでいたおじいさまへの想いが強く、家を建て替えるなら地元の木材を使い、自然エネルギーを活かしたエコハウスにしようと、ご自身で木材のこと、太陽熱利用のこと等をとても熱心に勉強されていた。当社の家づくりのコンセプトは、自然素材にこだわった健康木造住宅。私も「木」が大好きなので、鈴木さんとすっかり意気投合。自宅立て替えの打ち合わせのために奥様と一緒に当社へ来られたときも、二人で「木」の話で盛り上がりすぎてすぐに脱線。奥様に何度も軌道修正していただいて、やっとこさ打ち合わせが進んだという感じだった。

●学童保育所・運営委員長を務めたことも

その後、鈴木さんからは、木造化等に関する様々な勉強会にお誘いいただき、私も楽しいので都合がつく限りご一緒してきた。そうした中、鈴木さんが自分の家づくりの勉強にとどまらず木こりをやり、地域材で木造建築を進める活動を始められたこともみてきた。

その結実として学童保育所木造化プロジェクトのお話を伺った時、会社の採算は度外視で協力させていただこうと即断した。なぜなら、10年以上前ではあるが自分の子どもも学童でお世話になり、そのときからプレハブ学童を何とかしたいと思っていたからだ。当時、学童保育所の運営委員長を務めたこともあり、あまりに酷い夏の暑さに、せめて床だけでも直せたらと、木材を提供して貼り換えを行ったこともある。

そんな経験から、学童保育所の木造化が進められるならこんなに素晴らしいことはないと思う。

●このプロジェクトに対する想い

当社が関わるのは、第1棟目の山里学童保育所さんに始まり、あおぞらさん、松栄さん、現在建設中のはくほうさんで4棟目。山里さんは、私たちにとっても初めての板倉造り。当初、進捗がとても心配だったが、東海林さんが板倉の経験をお持ちの大工さんに声をかけてくれ、問題なく進められている。こうしたつながりで、新しい価値ある木造建築が生まれることがうれしくもあり、偶然ではあるが、根羽村森林組合とのコラボで根羽杉・国産無垢材の家づくりを推進してきた私



としては、今回、矢作川流域圏懇談会・山部会の取材ということで、またまた不思議なご縁と驚いている。

この学童保育所木造化プロジェクトの良いところは、単なる仕事上のつきあいではない多くの出会いがあり、とにかく楽しいということだ。これからも、木が好きな人をもっとたくさん巻き込んで、楽しく家づくりが進められるとよいと思う。そのつながりで、老人ホームやコミュニティセンター、低層住宅なども手掛けていって、さらに地域材建築の輪が広がるのを期待している。



2020年10月 松栄学童上棟式のころの建築現場



2020年10月松栄学童にて。体に安心な防蟻剤・ホウ酸の塗布作業を子どもたちと一緒にやる

(三ツ松由有子)

4 まちと森とを繋ぐこと

～ 今こそ、「矢作川の恵みで生きる」ことの共有を～

都市の中でコンクリートとアスファルトに囲まれ、効率的・便利な暮らしをしている私たちにとって、今回の取材を通して木の香る空間に触れたことは、何とも言いようのない新鮮な体験だった。ここ（学童）で長い時間を過ごす子どもたちにとってこそ、それぞれの多様な時間を許容するこのような場が、彼ら彼女らの成長にとって重要なことなのであろう。森と子ども未来会議は「まちの中に森を」というテーマで学童保育木造化プロジェクトを展開しているが、単に山の木材を使うという一方通行の関係性だけであってはならないという思いもある。

木材を供給する山・森の現場がどうなっているのかについては、既に矢作川流域圏懇談会での一連の「担い手づくり事例集」（2013年度～現在）で紹介しているように、極めて画期的な取組が展開されているものの、持続的な担い手の確保や山村定住問題、山の荒廃など未だ多くの課題が残されているのが現状である。このことは山の恵みを受ける都市の人々も知っておくべきであり、私たち川下の民としての役割・責任として目をそらさずに向き合っておきたい。



【山の課題】2000年東海豪雨での矢作川源流沢抜けの状況と土砂災害(資料提供:豊田市矢作川研究所Rio、愛知県砂防課)

● 都市と森の相互関係を構築しよう

矢作川流域圏の中で、今まで最も熱く山から都市へのアプローチを展開してきたのは、山の民を自認する源流域・根羽村森林組合の今村豊氏である。2014年から「木づかいライブ・スギダラキャラバン」を展開し、多い時で年間50回も下流域、都市へと広報活動として訪れている。その今村さんが今回の取材にも同行し、さらには新たな取組として始めた山梨県の南都留森林組合との連携パートナーである辻康子氏をお誘いし、名古屋市学童保育木造化プロジェクトの現場を見て回ったのである（2021年12月25日～26日）。木づかい促進というだけでなく、森でのプレイスメイキング（居場所づくり）にも妄想、いやドリームが膨らんでいるようだ。



根羽村森林組合 今村豊氏



根羽村森林組合・まちへの「木づかいキャラバン」



南都留森林組合の取組（ツリークライミング、森の学校）



南都留森林組合HPより

一方、都市側から森へのアプローチ事例としては、鈴木建一さんたちが学童の子どもたちや保護者を何度か林業の現場へと連れて行っている（以下及び16頁 唐澤晋平さん参照）。森と子ども未来会議の設立趣意書（2頁参照）には、「森林や水源の持続的保全が地域と日本の課題である」とも謳われており、この理念に沿ったものだ。今までこのようなまちからの取組はあまり聞いたことがなく、斬新。鈴木さんは、「子どもたちには山のことも知ってほしい」（11頁）と述べており、おそらく今後も続いていくのだろう。矢作川流域圏懇談会では、これを見守っていきたい。

- ◇ 2020年11月 あおぞら学童保育クラブ（児童20名 保護者10名）が額田へ
～ 唐澤さん指導で林業体験、株式会社しらいにて製材体験も行う
- ◇ 2020年12月 あおぞら学童保育クラブ（保護者3名）が鳳来町の山へ
～ 荻野定雄さん（額田林業クラブ元会長）協力により6mの丸太3本を伐採、名古屋へ運搬
- ◇ 2021年 8月 春日井のグットビレッジあのね（児童50名 保護者10名）が額田へ
～ 唐澤さん指導で林業体験

● 学生たちを森へ

豊森なりわい塾（2014年 山村再生担い手づくり事例集Ⅰ参照）運営で知られる地域の未来・志援センター事務局の三ツ松由有子氏は、今回取材に参加すると同時に、学生たちを森に連れて行こうというプロジェクトを模索していた。コロナ禍の中で幾度か頓挫しながらも、22世紀奈佐の浜プロジェクト・学生部会や根羽村森林組合の今村豊氏をはじめとする今回の取材チームの協力により、また今回の取材（2021年12月26日／美浜町）で出会った桑山工務店・桑山久氏と名城大学・木造建築研究会の学生さんたちも加わり、ついに2022年3月9日～10日にかけて根羽村での森林・林業体験インターンを実施したのであり、以下に報告させていただく。

なお三ツ松さんは、2019年にも学生を額田・奏林舎の唐澤晋平氏のもとへと林業体験に送りこんでおり、その一人、四日市大学の学生だった平野智也君は、この春2022年4月より三重県松阪市の森林組合に就職することとなった。林業や森林に興味を持つ若者たちは確実に増えてきている。以下の企画は今回パイロット的に実施したものであるが、とても有意義な経験となり今後も継続していきたいと思う。

「根羽村森林組合インターン」企画（岐阜大学 米田紗歩 / 22世紀奈佐の浜プロジェクト学生部会）

目的；農山村や里山を生かしたこれからの林業のあり方や、林業だけにとらわれず、人々の憩いの場や健康、子どもたちの感性を育むような新しい森林空間のあり方について、根羽村のトータル林業や森林空間活用、プレイスメイキング等の事例を通して学ぶ。また、山村や里山におけるこうした意図的に林業を選択して一次産業の担い手となっているIターン移住者等のライフスタイルや、自己実現のあり方についてブレインストーミングを通して検討する

（以下氏名は敬称略）

主催；地域の未来・志援センター、22世紀奈佐の浜プロジェクト学生部会、
矢作川流域圏懇談会「ミライ会議」

協力；根羽村森林組合（今村豊、小野隆治、山本英介、山本徹、木村勇太）、
矢作川流域圏懇談会海部会（高橋伸夫）、中部流域連携ネットワーク（近藤朗）

参加者；大学生5名（岐阜大学）米田紗歩、（椋山女学園大学）飯坂温子、
（名城大学）木造建築研究会 服部あやな（+妹さん 服部友菜）、安江志乃
桑山工務店 桑山久（木造建築研究会協力企業）

日程；2022年3月9日（水）～10日（木）

場所；長野県根羽村森林組合及び施業現場、ホテル岡田屋（宿泊・意見交換会）、小川川沿の森とサウナ

行程；3月9日／① 根羽村トータル林業の話 ② 伐採・植栽等施業現場見学 ③ 今村さんと意見交換会

3月10日／④ 製材工場視察 ⑤ 間伐（伐採）体験、プランコづくり

⑥ Iターン林業従事者たち（小野、山本、木村）との意見交換会



米田紗歩さん



根羽村での林業体験など





● 妄想を実現させる共感力

2日間にわたる林業体験インターンの締めくくりは、根羽村森林組合の御三方、全員がIターンにより根羽村にやって来られた方々であるが、小野さん・山本さん・木村さんと学生たちとの交流・意見交換会を行った。根羽村に来た動機やここでやってみたいこと、山での生き方など、これから生き方を模索して行くことになろう学生たちは、様々な示唆をいただいたと思う。

小野さんの発言の中でとても印象に残った言葉がある。「今村さんは妄想家。その妄想を実現、具体化してきたのは俺たちだ！」この言葉に他の二人も頷いていた。そうか、妄想家というのは今村さんにピッタリな表現なんだけれど、妄想って何なんだろうと改めて考えてしまった。これは常識や既成概念にとらわれないわくわくする夢なんだよね。熱い思いがあるからこそ共感者が現れ実現へと動き出すというのが、正に矢作川流域圏スタイルなのだと痛感した。

今回の小原木材・小原淳社長への取材においても同様の感想を持った。本意ではなく2002年、小原木材を継ぐことになった新社長が、外材ではなく日本の木材に目を向けようと社内改革を断行、そのことを都築部長に「当時、どう思いました？」と尋ねると、2008年に岡崎の水源地の森を借り受け保全・活用を図る「天使の森プロジェクト」を始めた時に、やっと社長が何をめざしていたのかが理解できたのだと言われた。6年ほど時間はかかったけれど、本当の意味で社一丸となって共感できたのですね。それらの夢は決して独りよがり・自分のためのものではなく、社会や未来に向けたもの。だから、自らも楽しみながら共感することができたのでしょう。



by



地球の健康を持続させる為に人類の英知と行動を必要としています
What's the earth needs now is your wisdom and your action.

天使の森プロジェクトHPより

モデル地域づくり - 山と町と海 -

太古から人々の生活は山と密接に結びつき山から海へとつながる水の循環の中で文明を築いてきました。ピラミッド図にみられるようにそれぞれの階層には地球生命体が成り立つ役割があり、その仕組みの中で人類を含んだ生態系が成り立ちます。

奥山	奥山	生物多様性の保全地域
里山	里山	人類が自然との共生を図りながら産業形成する地域
人里	人里	環境共生の中で人類が豊かさを享受する地域
里海	里海	自然生態系を優先する中で、人類が海洋との接点を持つ地域
海洋	海洋	生物多様性の保全地域

森と子ども未来会議が2017年に発足し、きわめて短期間で学童保育施設木造化プロジェクトをいくつか実現させてきたプロセスも、様々な共感力の結集に見える。それ以前から鈴木建一さんと繋がった人々、東海林さんや唐澤さんなど（設立発起人には木の駅・丹羽健司氏の名前もあった）、今回の事例集で紹介した同志たちとの出会いと共感が、妄想を大きく膨らませ具体化させていったのではないかと思う。参考までに彼らが辿った経緯を次頁に年表としてまとめてみた。

私たち、特に都市民はもっともっと山や森のこと、さらには海のことまで知らなければならないと感じた。しょせん誰もが流域の恵みで生きていかねばならないのであり、決して他人事ではないのだから。「森と子ども」を始めとした様々な取組が展開されていることに大きな感動を覚えつつも、山や海の現状が決して楽観視できないことを知っている。だからもっともっとこのような活動は広がり、繋がっていかねばならないと思うし、それに寄与することは私たちの責任ではないだろうか。

森と子ども未来会議の構成団体・メンバーなど（設立時）

名誉顧問; 日本板倉建築協会代表 安藤邦廣（筑波大学名誉教授） 発起人; 鈴木建一はじめ多数（以下）

学童関係	建築・工務店関係者	森の関係者
愛知学童保育連絡協議会 名古屋市学童保育連絡協議会 建交労愛知学童保育支部 など	東海林建築設計事務所 東海林修 (株)安井工務店 安井健 など	奏林舎 唐澤晋平 木の駅アドバイザー 丹羽健司 など

森と子ども未来会議の年表

年	森と子ども未来会議	矢作川流域圏（森）の動き
2002		小原淳氏が東京から戻り、小原木材社長に就任
2005		矢作川 森の健康診断がスタート(～2014)
2008		小原木材「天使の森プロジェクト」開始
2009		今村豊氏が根羽村森林組合職員に、南木一美氏移住 豊森なりわい塾がスタート
2010		矢作川流域圏懇談会がスタート
2011	東日本大震災が発生(2011.3/11) 多くの人に衝撃を与える	
2013	鈴木建一氏が大宝運輸取締役役に就任、この年「名古屋木工機械展」に参加し、唐澤晋平氏、東海林修氏と出会う	矢作川流域圏懇談会山部会で 「山村再生担い手づくり事例集」調査がスタート
2014		唐澤晋平氏夫妻が岡崎・額田に移住 根羽村森林組合(今村豊氏)が 「木づかいライブ・スギダラキャラバン」をスタートさせる
2015	鈴木建一氏、額田木の駅プロジェクト設立に参加する	額田木の駅プロジェクト設立
2017	鈴木建一氏が全国建交労協議会に参加、新執行委員長が元学童指導員であり、学童保育施設と板倉構法が結びつく 「森と子ども未来会議」が設立される(2017.10/1)	矢作川流域圏懇談会山部会で 「流域圏担い手づくり事例集」調査がスタート
2018	まず、「山里学童保育クラブ(昭和区)」が木造化に向け動き出す	唐澤晋平氏「奏林舎」を設立
2019	山里学童木造化、中川学童保育所(港区)木装化が完了	
2020	あおぞら学童保育クラブ(緑区)木造化完了 (8月以降)学童保育木造化勉強会を開始する	
2021	松栄第一・第二学童保育クラブ(昭和区)木造化完了 2021年度予算より名古屋市が学童家賃補助を大幅増額、 木造化への追い風となる	矢作川流域圏懇談会「ミライ会議」発足(8月) ミライ会議において「森と子ども未来会議」を 流域圏担い手事例集として取材(12月～2022.3月)
2022	森と子ども未来会議が、「脱炭素チャレンジカップ2022」において 文部科学大臣賞(社会活動分野)を受賞(2022.2/15) はくほう学童保育クラブ(尾張旭市)、有松学童保育所(緑区)、 こどもの家みなみクラブ(沖縄県)木造化が続々と完了	

(近藤 朗)

5. おわりに

- 脱炭素チャレンジカップ2022で文部科学大臣賞（社会活動分野）を受賞！

「脱炭素チャレンジカップ」は、様々なパートナーと出会う「場」を提供し、地域活動の活性化とネットワークの構築を促進し、あらゆる主体の連携が深まることで、脱炭素かつ持続可能な地域づくりへの加速化を図る取組。2022年2月15日に、脱炭素チャレンジカップ2022で、森と子ども未来会議が文部科学大臣賞を受賞するという快挙を成し遂げた。



- はくほう学童保育クラブ新築見学会+学童保育の木造化勉強会

2022年3月27日、一連のプロジェクトで木造化・木質化された6棟目の学童保育となるはくほう学童保育クラブで、新築見学会と学童保育の木造化勉強会が、現地とオンラインのハイブリッド方式で開催された。この学童は交通量が多い坂道に面しており、すぐ側に建物が隣接するという立地条件に、工夫をこらして建てられた。勉強会では、これまでに木造化されたそれぞれの学童で、保護者同士がどのように協力し、知恵と労力を出し合っ、木造化を達成するまでの体制づくりや資金集めの苦労を乗り越えてきたかというお話を聞くことができた。



脱炭素チャレンジカップ2022
オンラインでプレゼンする鈴木さんと東海林さん



はくほう学童保育クラブ



学童木造化勉強会
(はくほう学童保育クラブにて、2022年3月27日)

●学童保育木造化プロジェクトを取材して

・木のアイテムがあると、その空間に幸せな人が集まる。木のアイテムを中心として、そこに地域の絆ができる。森のようちえんがあるから移住してくるとい親がいる。木の学童があるから移住してくるとい親もでてくるかもしれない。それから、板倉構法は木を有効に使える。板に挽くので、大径木のスギをえる。大径木のスギの使い道としては一番いい。ありがたい。同じように大径材をえるCLT工法は、接着剤をがちがちに使うのがネックになる。(今村)

・あおぞら学童保育クラブは子どもたちが自分たちで考え、設計した。椅子や本棚、階段も。昔の原っぱの秘密基地と同じ。一番大事なのは、木や土のような自然素材を使えば失敗することもできるということ。やり直せる。鉄やコンクリートでは失敗できない。失敗できる環境は大事。都会の親は、どうやって子どもを失敗せずに育てるか考える。だから何でも押しつける。そうやって社会に出るまで育てれば、どういう大人になるかわかる。子どもには、失敗できるうちにたくさん失敗させればいい。(近藤)

・プレハブの学童保育を、地域産の木材を使って、板倉構法で建て替える。その効果は絶大だった。子どもたちの心身が健やかになり、指導員は落ち着いて子どもに向き合えるようになり、保護者は安心して子どもを預けられるようになった。迷惑施設だった学童は、地域の人が喜んで、公民館のように使うことができる施設になった。鈴木さんの「木造になった学童では子どもと保護者、地域がちりつながる。木造化した学童は、絶対に地域のために必要という思いがある。町内会長は1年で変わるが、子どもを1人預ければ最低6年になる。6年は短いようで長い。地域に埋もれてしまった親同士のつながりが作れる。子ども同士も同じで、弟や妹ができる。いま、いなかでも都会でもこういう世界は貴重な財産。」という言葉に心を打たれた。

このプロジェクトは、志のある地域の林業や製材、建築のプロもつなげた。今回お話をうかがった唐澤さんや小原さん、白井さんが共通して、多くの物を生産し、消費することで回る資本主義の価値観に疑問を感じ、地域の森を守り、生かす意義を語っておられたのが印象的だった。事例集づくりは「流域内でお金、人材、物がまわる流域内フェアトレード」の実現をめざす活動だが、一昨年、流域圏懇談会10年誌をつくった時、流域再生のためにはもっとまちの人びとを巻き込まないといけないという認識が共有された。この活動は、その一つの理想型と言えるかもしれない。

2026年には第20回愛知・名古屋アジア競技大会の開催が予定されている。鈴木さんは、選手の宿泊施設を板倉でつくり、大会終了後、県内や市内の学童保育に一齐に移築できないか？という野望を抱き、実現に向けて画策している。これからも、森と子ども未来会議の活動から目が離せない。

(洲崎燈子)



取材者名

浅田益章

今村 豊（根羽村森林組合）

沖 章枝（水と緑を守る会・岡崎）

近藤 朗（愛知・川の会）

洲崎燈子（豊田市矢作川研究所）

高橋伸夫（西三河野鳥の会）

辻 康子（南都留森林組合）

浜口美穂（ライター）

三ツ松由有子（地域の未来・志援センター）

（五十音順）